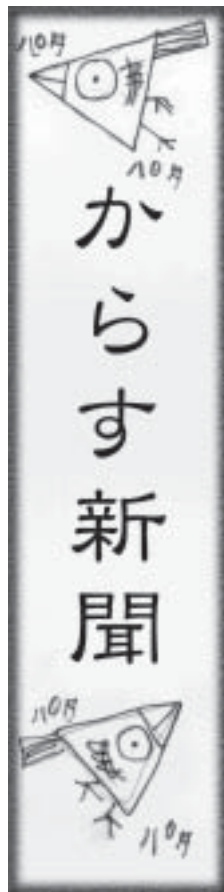




# 阿佐ヶ谷団地に 人情を見た!



第3巻第10号  
通巻第45号



本紙特派員記者Gが本社  
付近の路上で、偶然撮影し  
た日常の一コマ。

自転車故障して途方に  
暮れている女性がいた。そ  
こを通りがかった若者たち  
(というほど若くない人々)  
が力を合わせて、無事、自転  
車の修理に成功。  
メディアで取り上げられ  
るのは、やれ殺人、やれ放  
火、やれ汚職、やれ不景気  
だ、と陰鬱なものばかりの  
今日、あたりまえの親切が  
心温まる時代である。  
親切してるかい?

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号-1 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : [colors@go-karasu.com](mailto:colors@go-karasu.com)

心境の変化ではなく、些かの環境の変化があり、生活時間帯がすっかり変わってしまった。以前は午前五時から九時の間に床に着き昼頃に起きる、というのが、凡の日常であったのだけれど、近頃は、午前零時から二時くらいに寝たのだけれど、近頃は、午前、早ければ五時、遅くとも七時頃には目が覚めてしまふ。ある種、時差ボケ状態が続いているような、朝五時の阿佐ヶ谷団地はどこなところかという、夏だということもあり、思っていた以上に人が多い。シミヤやアゲハは静かに葉の上で羽を休めているように、だが、鳩や椋鳥は元気に食べ物を探して、あちこちの糞をつつき回っている。早起き猫は欠伸をしたり、蝉を追いかけたり。

早朝に見かける人々の平均年齢はかなり高い。私が最年少かもしれない、殊更元気な半ズボンの小学生を除外すれば、そんな時間から人々は一体何をしているのかというと、世に言うウォーキングである。一人で歩く人、夫婦のように見える二人連れ、数人の団体のんびりや花や空を眺めながら散歩といった趣の人ランニングが汗塗れになっているようなスポーツ感覚の人。犬を連れてくる人、犬に連れられている人。様々である。そんな中、私はデジタル・カメラやデジタルビデオを手にして歩いてゆく。擦れ違う人に、おはようございます、と声をかければ、概ね、おはようございます、と返ってくる。そんな朝方。それにしても、こんなに多くの人々がウォーキングをしているのはなぜだろうか。百日紅の花をばしやり、見知らぬ猫をばしやり、と、シャッターを押しながら考える。散歩を楽しんでいるにせよ、競歩かマラソンの如き有様で息を切らせているにせよ、人々の心

の片隅には健康に対する意識が見え隠れするようだ。善福寺川で鴨の類が並泳する姿や小鷺の水浴びをビデオにおさめながら、そんなことを考える。

人々の健康志向は意外なところからも窺い知ることができる。例えば、カレー。御存知のように、私は無類のカレー好きである。前世ではインド人だったのかあるいは、母方の祖先にインドの血が流れているのか、あるいは、そのどちらでもないかもしれないが、執にせよ、カレーの病に侵されています、と医者に宣告されてもおかしくない程度のカレー好き。近頃は、芦屋雁之助がインド人を演じたS&Bの広告の台詞「印度人もびっくり」で形容したいほどおいしいカレーを自分で作るようになってしまったほど(但し、本当にインドの人に食べてもらったことはない)、彼らが実際にびっくりするかどうかは不明である。そんな私は、つい先達てまではレトルトのカレーで我慢していた。ここ数年、どのレトルトも減塩化が著しく、物足りないことこの上なかつた。健康に拘る人々はレトルト食品など食べるはずなどないのに、と思うのは私だけだろうか。

カレーだけではない。見回して御覧じ。町には抗菌グッズが溢れかえっている。例えば、ボールペンを抗菌してどうするのだろうか。年輩の諸氏にお尋ねしたい。あなたが若かった頃、水をお店で買う時代が来るなんて想像したことがあっただろうか。空気清浄機だって必需品だと考える人だって増えてきているのである。世界一速いオートバイ乗りを決めるレースでさえ、少しは環境に与える害の少ない四ストローク

(最終面に続く)

## 今日の紙面から

- 一画 オーラ面  
松本と話をしつぽんぽん
- 二画 芸術面  
レイズギャラリー
- 四面 からすライブラリー  
本 『サン・ジャンの葬儀』  
AILE FLY CAFE  
CD 『CRISIS』  
五面(国際面)  
ロンドンレポート



からす新聞は××××  
が母体となつて、世界に文  
化と芸術を発信すべく発行  
しています。

誰でも自由に参加できま  
す(無茶じゃない範囲で)。

## 松本と話そうピンポンパン

くつだらないな。「いくら寝ても眠たい。それでも寝付けない。それでお医者さんに診てもらったら鬱病でした。お薬をもらって今では良くなりました。お医者さんってやっぱり頼りになります。」

いくら寝ても寝付けない？矛盾してんじゃないか。寝てんじゃないか。

ま、そんなことより最近このCMがよく流れる。「病院に行こう」キャンペーンなんですよ。広告主は誰だかよく覚えていないが、日本医師会か、薬品会社から接待べつたりの厚生省(今はなんて言っただけ?)か、そこからへんの外郭天下り団体か、なのでしょう。

僕は予備校で仕事しています。そしてここにこんなバカたれな講師がいます。高校生の生徒に恋した。が、見事に振られた。それで、何にもやる気がしなくなり、そのうちに体調までおかしくなり、病院へ行った。見事に鬱病と診断され、処方された薬(薬物)を毎日飲む日々である、という。

そこで、エスパー松本は、死んでるばあちゃんとコンタクトを取りました。「鬱病って知ってるね?」「何かきいたことはあるばってん、よく分からん。周りにはおらんやっただけ

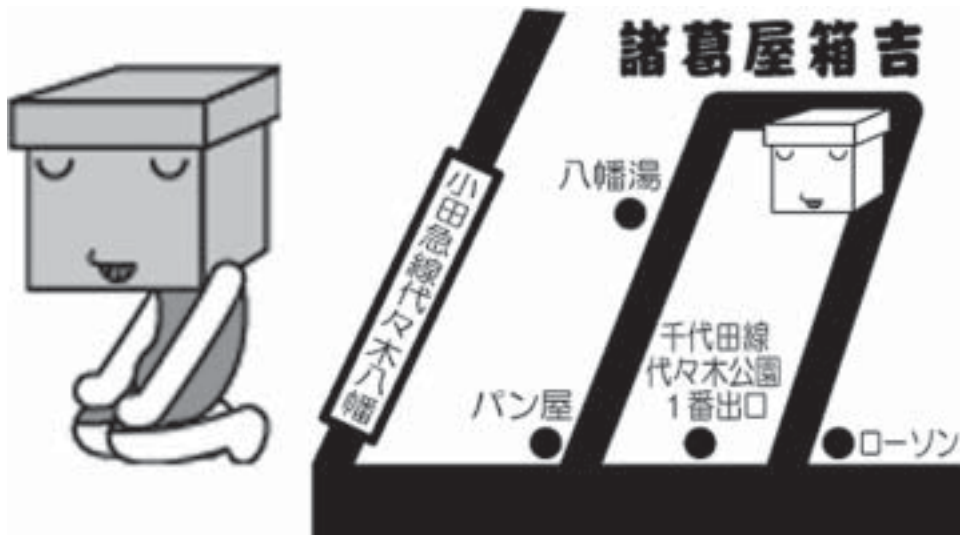
ん。どきやん病気ばいってね?」

「ストレスの溜まって落ち込んで何もやる気の起ころんようになって悪か方にか考えんようになる心の病ばいってばい。」

「そぎゃんとは病気じゃなか。死んでちようどよか。」

そのあとこんなことをばあちゃんは言っていました。旦那は酔っ払いで女作っでいなくなった。そのうち戦争が始まり長男は召集され結局戦死し、残った娘達五人(自分の母親はその一人なのだが)を、自分で小さな豆腐屋を営むことで育て上げた。だから嫌な思い(ストレス)は死ぬ程あつたが、それを溜めるとか落ち込むとかやってる暇がなかった。本気だったから。死にたくなかったから。本気で自分が生き残り、娘たちを一人前にしなければならなかったから。(感謝です。それで今のオレがあるんだから。)それでもしそうなったならば、それで何もやる気がなくなつたっていつのならば、自分を放棄してるんだから死んでいい。その時点で死んだも同然だから。そしてそもそも絶対に自分のことを軽々しく病人と呼びたくなかった。それは恥である、と。

そういえば政治家が悪事を働いて、逮捕を免れようと逃れるところは病院です。そこまですと言わないが、病気というのは現代人にとってとても役に立っている、そう思います。



諸葛屋箱吉(松本キックのお店はて、岩間玲の組むアートユニット  
架空プロジェクトが作品を展示しています。

題して『架空 空間』

お客さん参加型のボックスオブジェを発表。

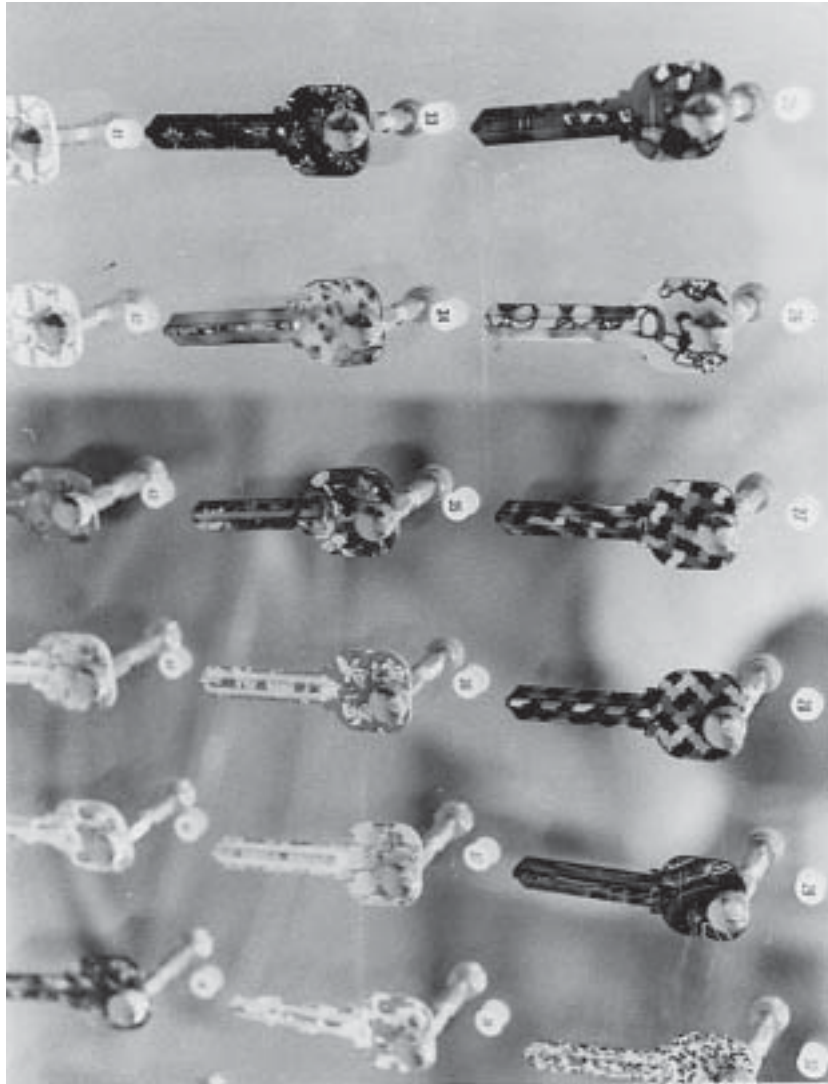
場所：渋谷区富ヶ谷 1-3-3 スズキビル 1階 小田急線代々木八幡徒歩 2分

営業時間 12:00 ~ 20:00 水曜日定休

tel:03-3485-1492

<http://www.hakokichi.com>

## Rei's Gallery



## KEY++

ついにカメラ(オシャレなKONIKAKA製が壊れた。私の父親からのおさがりでもう二〇年いやいや、私より年上の三〇年前のもので。何度か壊れていて、その度に行き付けのアンテイクショップにて修理してもらってたんですが、夏が終わると同時に寿命。

壊れる度にいくそのお店で、八ミリカメラと出会ったり、映写機と出会ったりして、それを買う代わりにおじさんが修理代をただにしてくれていた。もう、直らないってときに、カメラのレンズと引き替えに半額でキャノンFM2(ものすごく欲しいカメラ)を売ってくれると言われたけれど、あまりに愛着があったさすがに譲れませんでした。

でも一眼が無くなってしまった以上新たにもう一台購入することになって、最初はとりあえずお手頃なのでいくかーという感じで、オートプラスチック製のカメラを見せてもらっていたんですが、なんだかしっくり来ない。デザインは軽くて丸いはずり言ってダサイ。

でも、向かいの棚にあるアナログカメラは違う。工業製品の持つシャープな印象と持ちやすい重みがあって、かっこいい。長年使ったカメラの執着心があったか、やっぱりアナログカメラに惹かれてしまう。そして今までのカメラよりちょっといいのが欲しいなと思いついたらもう止まらない、気づいたらキャノンFM2を買っていた。アイタイ。でも、嬉しい。

というわけで、今回のこの写真はFM2で撮った記念すべき第一号写真です。やっぱり、工業製品って並ぶと綺麗。さらにこの鍵にはPOPなイラストが描かれていてかなり私好み。

# 『サン・ジャンの葬儀屋』

## Edmond Ganglion & Fils

ジョエル・エグロフ

(松本 百合子訳)

Joël Egloff

アーティストハウス、2000年

ISBN: 4048973096



なかなか気の利いた物語である。フランスの辺鄙な町。眺めていない砂時計のように、気づかぬうちにさらさらと時間が通りすぎてしまふような。そんな町に、とぼけた事件が発生する。如何にもフランス的な気取りと、寧ろイギリス的なブラッくな笑いが程よく共存。グロテスクな事柄も包含してしまふとぼけた味はな

なかなか貴重である。落ちも良好。街並や人物の描写が薄い感じがするものの、そのおかげで、想像が自由に飛び回る余地がある。おそらく、読み手によって受け取る世界は随分異なることだろう。あなたは、この物語をどう受け止めるのだろうか。

(全太)



# CRISIS

Mike Oldfield

Virgin、B00004T9A0、

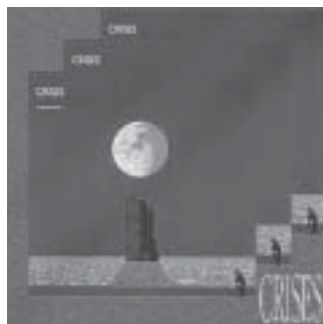
1983年



CDs

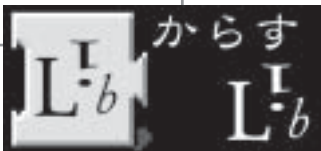
製作者の世代が若い頃長く聴いた音楽なんだらう。しかし、いくらなんでも安易に過ぎる。どこがやり始めたのかはわからないが、何でもかんでも右に倣ってしまうのは、日本人の悪い癖である。そして先週初めて聴いたのが、『ムーンライト・シャドウ』だ。キヤノンがプリンターのCMに使っている。マイク・オールドフィールドのオリジナルそっくりで、どこかの知らないおねえちゃんが歌っている。ついにここまで攻めてきた

最近、コマーシャルのBGMに7、80年代の音楽を良く耳にする。特に多いのは車業界だ。TOYOTAはキング・クリムゾンの『21世紀の精神異常者』を使つたし、三菱はジョン・レノンの『ウーマン』、スバルはジミー・クリフの『メニ・リバーズ・トゥ・クロス』などなど。いずれも屈指の名曲ぞろいである。



か、この思いもあるが、知らなかった人が過去の埋もれた名曲を知るいい機会にもなるだろうと思ひ直して、収録するアルバムをここで紹介することにした。マイク・オールドフィールドは本来ギタリストで、『ムーンライト・シャドウ』を歌う透き通る声はマギー・ライリーという女性ヴォーカリストである。

(望月)



# FLY CAFE



友人と半年以上の構想を経て、ようやく実現へと歩み出したFLY CAFEのプロジェクト。時の経過は早いもので、そのFLY CAFEは次回九月二十八日をもって二回目を迎える。

プロジェクトの核となるコンセプトとなるものは、「共有空間開発プロジェクト」。それは、プライベートとパブリックの間にある、「共有空間」。人は、風、光、音、匂い、気温、湿度、感、気流、天候、etc を感じる。視覚的に、聴覚的に、嗅覚的に、味覚的に、触覚的に。

そんな五感的感覚は、人それぞれの価値観だったり経験だったり興味だったり、そんな様々な要素によって、違いが生まれる。

連続するそのうちの一晚だけ、いろいろな人が同じ空の下でその場を共に過ごし、いろいろな大きい偶然が起きる。

おもしろい。

多摩川河川敷での秋空の下、空気を感、風景を眺め、音に揺られ、おいしいもの食べ、飲んで、気ままに。

はてはて。秋も深まる十月は、どこでやろう。

(森田敦子)



#〇九 色々な人達

そう言えは、ここにきてから初めに驚いたことは、外国人が多いことだった。街を歩いていても、地下鉄に乗っていてもインド系から、アジア系、アフリカ系、色々な人種を見ることが出来る。当時はヨーロッパのほかの国から来た人々とイギリス人の区別が良くつかなかったのだが、それでもそう感じた。自分が日本人だから当たり前なのかもしれないが、取り分け日本人の姿をよく見る。不思議なことに、海外旅行などで自分以外の日本人に出くわすと気分を害したような顔をすする人がいる。もしくは妙によそよそしく場所などを変えて避けたりする場合。まあ、せっかく日本の外に出て異文化の中にいる気分を満喫しているところで、その場所が日本人だらけだったら、がっかりする気分もわからないが、ちょっとおかし。それに加えて、今まで周りが全く日本語を解さない中で好き勝手にしゃべりをしていたところ、急に日本語が通じてしまう人々に出くわして躊躇してしまう場合もある。いずれにせよ、意地悪いのかもしれないが、注意深く見ているとちょっと面白い。

それとは別に、こっちに住んでいる日本人同士でも、おかしなことは結構ある。例えば語学学校の中。自分が語学学校に通っている頃はこんな事がよくあった。クラスメイトであらうかが何であらうか、絶対に英語でしか喋らない人。なるほど、英語を勉強しに来ているのだからそのぐらいの心構えは必要かもしれない。そう思って、「こちらがつかない英語で頑張ってるのうかと思えば、あ、あなた英語喋れないのね。ふん」ってな調子で返されると、手の打ちようが無い。じゃあどうすればよかったんだと考えた所で、もっと勉強しなさいとのことか、落ち着くだけである。それは逆に、英語で話かけようものなら、「いやっ、ちょー嫌みじゃない？あの人」とくる人達もいるから大変で、話かける前に、

この人は英語で話かけた方が良いのか、日本語の方がいいのか、思わず様子を探るほど慎重になってしまふ。何故かこう言った類いの人達は、大抵が女性で、ピリピリしている感じの人に多い。

ロンドンには色々な立場の外国人がいるが、特に語学学校の中ではこう言った細かな「あたしの方があなたよりも立場は上よ」的な水面下の争いが多く感じられるのは何故だろうか。例えば、イギリス人の友達がいるとかいれないとか、日系系列のところでバイトをしているとか、そうじゃないとか、色々である。自分の周りには色々な人がいて、王立音大でピアノ、ファッショ、美術史などをそれぞれで勉強している学生。美容師としてこっちで働いていたり、仕事でこっちに来ていいる人なんかもある。はたまた、こっちのお笑い番組(?)的なTV番組でメインキャラクターとして活躍しながら舞台やミュージカルをこなす人、三年ぐらい前にポーランドから友達と旅行に来て(彼はポーランド人)、そのままお金もない、英語も話せないのにここに残り、アルバイトしながら今では知り合いのアーティストレクターやらデザイナーなど、とちよくちよく小さな仕事をしたりして頑張っていたりと実に様々である。僕のクラスメイトのアルバニア人は、コソボから来た難民だと偽り(母国語が同じらしい)、他のクラスメイトや先生にまで、両親は戦争で死に、今はおばさんがこちらにいるので世話になっている」とのストーリーを語っている。こっち僕に本当のことを教えてくれたのだが、彼にしてみればイギリスのパスポートの申請中で、何処から調べが入るかも分からないので、誰に聞かれてもそう答えなければいけない、と言うストーリーがあるらしい。一度、担任に幾つか質問されているのを横で

聞いていたのだが、結構面白かった。学校には行ったことはなく、毎日父親に山で羊の番などをしながら、英語やらその他の勉強を習い、こっちに来る時はイタリアまで漁船で渡り、そこからトラックに乗って北上し、フランスを電車で縦断したとのこと。当時は色々な人生があるものだと信じていたが実は彼、向こうで大学まで出ては余りない。こっちで大学の、色々な人達の中では余りその「水面下の小競り合い」は感じられない。もしかしたらそれは、みんなそれぞれに自分のやりたい事、ここにいる理由のような物がはっきりしているからなのかもしれない。もちろん語学学校生にだってしつかりとした目的はある。自分もそうだったし、今でもそうなのだが、やっぱり英語を使えるようになりたいのだ。ただこっちに来る前には一大決心だったその目的も、こちらに来て見れば現地の人からは「あら、あなた英語なんか勉強するためにココにいるの?」「日本でも出来るじゃない」「ぐらいいいしか見てもらえないことが多い。いちいちもつともだが、そう言われてしまつと結構、身も蓋もない。に加えて、自分が日本でもやっていった何か、出来る事が、言語が変わる

(英語が十分でない)だけで、発揮出来なくなってしまう場合がほとんどで、会社を退職して来た人や、学校で専門的な勉強をしてきた人などはみんな、いきなり自分が零の状態になってしまったかのように感じてしまいがち。そんな所から来る焦りのような物がその「水面下の小競り合い」を生みやすい原因なのではないだろうか。海外で暮らすと言う事は、そう言った焦りも含めて自分が何をしたいのか、何が出来るのかを見つめ直す良い機会になっているように思える。

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。あなた一人で悩まないでください。

相談無料 秘密厳守  
ら致対策指導 いたします



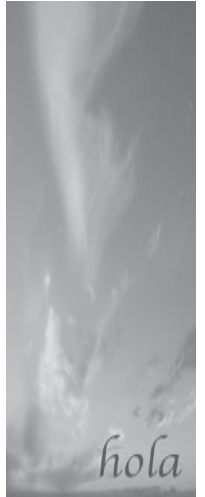
produced by P.D.Agency

tora@pda.co.jp  
1843 N. Cherokee AVE. APT. #216  
Los Angeles: CA 90028, USA  
voice : +1-310-493-1001  
facsimile : +1-323-466-5645

ないのかも知れない」そんな事を思い、ちよつと



深い秋。二〇〇一年、パリにて。  
 どうもこの街は襟巻きが似合いますな。暖かい南の土地もよいのですが、どことなくこのクールな気候に知的なものを感ずる。マドリッドから着いたとき、気温は摂氏10度と機中でアナウンスしていたのに、両隣に座ったスペイン人のおばちゃんや若者は、ひとの頭の上を通り越していいかげんにしてほしいくらいしゃべりまくった揚句、もっとずっと暖かいものと聞き間違えていたようだ。陽気なのはよいのだが、迷惑という概念もないのだな。これだから南のかたがたは困る。



昨年からプロジェクトに携わっているアリカントという街には、まだ半袖の輩がたくさんいて夏の終わりのようですらある。どうも芸術とか抽象的な思考というものが成立しにくいのではないかと、もともとこの一週間ほどの好天は西ヨーロッパ全体に渡っていたらしく、パリとて同じことなのだが、それでもどうもこの落差、などと言っているわけではない、この違いは相当なものである。

今回は、パレロワイヤルの近く、オペラ座からモリエールといえは、かつてスイスに行ったときを思い出します。新学期が始まって最初に与えられた課題が、劇場の舞台にセットをつくるというもので、想定された演目がモリエールの『アンフィトリオン』だったわけです。教養のないものは名前が知っていてもそのような重要な古典すら読んだこともないし、現地では英語の本も見つからず、しょうがないのでつたないフランス語で、さして厚くないペーパーバックを読まざるをえなかったことです。フランス語の実力などおして知るべし、ほかの学生がすべて読み終えてもまだ冒頭の数ページをさまよっているというぶざまな結果で、ある言語を母国語にしておるといふことはいかに素晴らしいことかと思いつつ、結局あらずじを聞いて作品をつくったことでした。ただ物語の内容を詳細に知らぬことは、かえって自らの勝手な解釈の上に作品性を強めることを助長したといえなくもなく、楽しく抽象的なインスタレーションにはすることができました。

ない緊張感の痕跡とともに、モリエールの名前は深くインプットされているというわけです。こつこつ文学、教養という面に関しては、得意な方がほかにおられるはずだと思いつつも、舞台というか劇場というかそのようなものにはすつと漠然たる興味をもっておりました。ものものの、劇場という建築をさすのかどうか、そこところははっきり区別できないのですけど。



実は、先日、事務所からチケットをもらい、日本の第二国立劇場なるものへ行きました。この劇場が97年にできてから初めて行ったことになりました。この建物は、涼々たる建築家が参加した国際コンペで設計者が決まったもので、いわば日本国が威信を懸けて建設したはずのもです。ですから本来、もっと早くに見ておかなければいけないようなものなのに、そうしなかったのはひとえに、選ばれ実現された計画案に何も新しいものを見つけられなかったからです。何も感じないどころでもない案だったわけですが、劇場というものが、古来の建築としてのタイポロジーを踏襲しているかぎり新しいものはないのかもしれないという議論はあるにせよ、この建物はさらに輪をかけて何もないのである。新たな国立バレエ団の創設やさまざまな機構の提案など、国立劇場のソフトとしては新しい試みはあるのだから、空間、場としては、おそらくゼロである。もともとこの建物のとなりの高層ビルにはアップルコンピュータの本社があるという意味では大切な場所ではあるのだが。

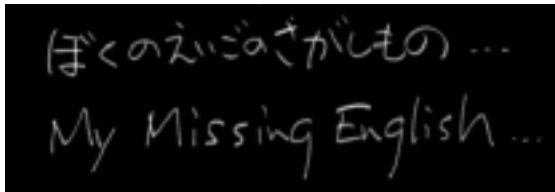
もらったチケットは、バレエの演目で、こちらはシエークスピアのロミオとジュリエット。これ程だと流石に知っている。10月26日の朝日新聞(昨年である)に、スターが脇役を踊ることについてのコラムが載っていたが、その公演がまさにこのときの公演なのである。スターとは熊川哲也のこと、ロミオの友達マキシー役の踊り手が直前にけがをしたため、英国ロイヤルバレエでこの役を踊ったことのある彼に急な連絡があったそうだ。会場のおばさんたちは、偶然にも、チケットなどなかなか手に入らぬ熊川を生で見られるとはラッキーと、それは大変にはしゃいでおられるし、終幕の拍手も人一倍大きく、ほとんど主役を食っていたのは確実である。実力の世界とはいえず、あまりにも節操のないファンのようなひとびとに呆れていたのだが、それでもなにかキャストのバランスを重視してステージがこじんまりとまとまるのではなく、実力あるものが、たとえ主役ではなくとも、ひとつの役割として加わることによって生まれるダイナミズム、っていうのはありだよなと思えました。彼の踊りは大変に素晴らしいので、だからこそ、そんな新たな物事がありよつというのを感じました。これまでの日本だったら、主役より実力のあるダンサーを脇役に呼

(最終面に続く)

# a と the

象のヨタローとキリンのカタコンベはおわんに乗って大西洋を横断中。陸地が見えています。イギリスのようです。でもたのみのおわんがひっくり返り・・・

The old sea, ah!  
An elephant jumps in:  
The water's sound!  
「古海や 象の飛び込む 水の音」



もちろん例外はある。たとえば「種類全体」を言う場合である。  
蜻蛉かげろうという昆虫すべてのことを言おうとすると、mayflies、a mayfly、the mayfly のすべてが可能である。

Mayflies don't bite.  
「蜻蛉は噛まない」

A mayfly doesn't sting.  
「蜻蛉は刺さない」

The mayfly doesn't have mouth.  
「蜻蛉は口を持たない」

ただし、a には「1つの」、the には「その」という基本的な用法があるため、ふつう使われるのは複数形の mayflies である。

Mayflies die in a day.  
「蜻蛉は一日のうちに死んでしまう」

ところでカタコンベの俳句だが、もちろん次の芭蕉の句がある。

The old pond, ah!  
A frog jumps in:  
The water's sound!  
「古池や 蛙飛び込む 水の音」

出展 “Zen and Japanese Culture” Daisetz T. Suzuki  
『禅と日本文化』鈴木大拙  
原文は英語で書かれており、俳句も大拙による英訳。

the pond からは、特定の「古池」が連想され、そこに a frog、特別でないふつうの「蛙」が一匹飛び込む。するとそこから特別な the water's sound「水の音」が響き渡る。

大拙は、the water's sound が芭蕉という天才によってのみ直感された「特別な水の音」であり、それが起こった池も the old pond「特別な古池」であるということで、どちらにも the を付けている。(望月)



On to the bottom of bowl  
Holding, sleeps  
The little elephant, oh!  
「腕底に とまりて眠る 子象かな」

蕪村に次の句がある。  
On the temple bell  
Perching, sleeps  
The butterfly, oh!  
「釣鐘に とまりて眠る 胡蝶かな」

“Zen and Japanese Culture”  
Daisetz T. Suzuki  
perch = (鳥などが)止まる



a は、いろいろある中の「ひとつの」  
the は、特定の「その」

中学一年の問題である。次の日本語をあなたはどう英語にするだろうか？

「私は放課後公園に行きます」

I go to the park after school.

正解である。だが、

I go to a park after school.

ではだめだろうか？ もちろん正解である。違いは以下の通り。

(いつもの)公園に行く 具体的。「高円寺中央公園」というように公園が特定されている「その公園」。お互いにその公園のことを知っているときにふつう使う。

(決まっていけど)(あなたには教えないけど)とにかく公園と呼ばれる場所に行く 具体的な公園はイメージされず、「公園」というところ。

日本人の英語には、名詞には何でも the を付けたがる傾向があるように思う。日本語にその区別がないのだから仕方がないが、もちろん the ではなく a が適当なときもあるし、複数のときなど冠詞が不要な場合もある。

上にあげた問題で、もしもあなたが無条件に the park としてしまったのなら、その原因は、中学時代に使い分けをまったく教えられず、「とりあえず the にしておけ」であるからだ。実際、ほとんどの参考書、問題集でも冒頭の「私は放課後公園に行きます」の答えは、一般に “the park” となっており、多くの生徒たちはそのまま、「公園」といえば無条件に “the park” と反射するようになってしまう。

(六面から続く)

んだりしなかつたんじゃないかなあ。そんなことを考えながら、そのこと自体とても大切なことに思えた訳であります。

実は、この日、舞台では酒井はなというバレリーナがジュリエットの役を演じていました。これがなかなかよかったのです。思わぬ発見といえますが、いや、日本で初めての国立バレエ団の専属エトワールいやプリンシパルなのですからその方面ではすでに有名で、(実際それ以後いろいろところで彼女の記事を目にしました)単に僕にとつての発見といつたすぎないのですが、これがすばらしくよかったのです。もつとも自称バレエ通の某サッカーキチガイの友人に言わせると、それでもまだまだということですが、まあ日本のサッカーがよくなったということと似ているといえば似ていることなかもしれません。この彼女、事務所のボスが芸術院賞の表彰を受けたとき、隣にいたらしく、どうも若い人への奨励賞みたいなのを受けたということですが、いなく

(一面から続く)

が採用される始末。どうなっているんだ。いやはや何とも健康好きな国民になったものだ、日本人は。健康は、もちろん、結構なことであるけれど、<sup>し</sup>些か度を越しているのではないかと感じることも屢々。あるいは、われわれの健康はそれほど危惧せざるをえぬ状況下に置かれているのだろうか。

健全な精神は健全な肉体に宿る、という言葉がある。健全な精神でございませうか。そもそも健全とは何ぞや。まさか健一と全太の略称ではあるまいが……。こんな無駄口でお茶を濁したくなるほど「健全な精神」という物言いは胡散な匂いを嗅ぎつけてしまう私である。いけない、いけない。話がどんどん逸れていくぞ。

健全な精神は健全な肉体に宿る、という言葉は額面通りに受け取るとして、人々が斯くも健康に拘泥するようになったのは、なぜだろうか。単にメディアに躍らされているだけだ、という側面もある。そんなことを気にするだけの精神的、肉体的な余裕がある、何しろ、この国では爆弾や銃弾が身边を脅かすことは滅多にない(という側面もあるだろう)。けれども、もつ

とてもかわいかったということでした。

そんなことがあって、身体表現であるところの、と堅苦しく書いてみるのだが、そのバレエというものににわかに興味を持ったので、以前から持ちつづけている劇場への興味とともに、今回はなんとしてもパリのオペラ座でバレエを見ようという、その一点につきる奇道だったわけだ。

このあたりは、なんだかおもしろいところで、いろいろなものがあります。パリジャンだか田舎の人だかはわからないけれど、「この辺には世界中のすべての食べ物がある」などと楽しそうにしゃべりながら歩きゆく人とすれ違つと、まあそつだよなあといふ合点がいつてしまうのもその



とおりで、インドや東南アジア、中国、イタリア、アラブの料理や日本など、多種多様なレストランや小さな店がその界限にはならんであります。

つづく。(篠崎健一)

とも大きな理由は、この国が不健全に満ち溢れていることにあるのではないかと。

環境を破壊し、動植物を死に追いやる社会。そんな社会が人間にだけは安全なはずがないのは、我が家のでぶ猫にだってわかる理屈である。一昔前は、こともあおもて元気に遊ぶのが一番だ、というのが常識だったが、近頃では、外で遊ぶには光化学スモッグや酸性雨などなどの危険を引き受ける覚悟が必要だ。それだけではない。庖丁を隠し持った者や、言葉巧みに(あるいは、言葉巧みでなければ、力巧みに)子どもたちを連れ去るつとする者にも注意しなければならぬ。これを不健全な世界と呼びずして何と呼ぼう。

健全な精神は健全な肉体に宿る。結構、けれども、私はこう言いたい。不健全な心身は不健全な社会に宿る、と。個々人が各々をこの不健全な社会から守ろうとして、ウォーキングだの抗菌剤だのするのはかまわないが、それよりも、社会全体の健全さをどうにかしなければいけないのだ。そんなことを考えていたら、百日紅の桃色も色褪せて見える、少つづんざりする朝となつてしまった。

(全六)



Ken-ichi Shinozaki, architect

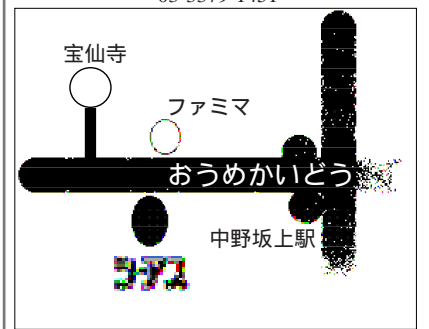
4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku,  
Tokyo 166-0015,  
Voice : +81-3-3220-0644  
Facsimile : +81-3-3220-0640;  
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

篠崎健一アトリエ

1クラス4人までの少人数制学習塾



中野区本町2-50-12 ドエル中野201号  
03-3379-1451



編集後記  
からす新聞第二巻第十号(通巻第四五号)、無事、発行できました。  
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。  
次号発行予定日は二〇〇二年十月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。